

待機的開心術における術前自己血貯血の有用性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩朝, 静子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00032079

主論文の要約

待機的開心術における術前自己血貯血の有用性

東京女子医科大学心臓血管外科学教室
(指導：山崎健二教授)

岩朝 静子

東京女子医大雑誌 第86巻 第5号 183頁～190頁(平成28年10月25日発行)に掲載

【目的】

心臓手術中の出血に対応できる準備血液としては、術前自己血貯血と同種血がある。前者のほうが、医学的によいとされながらも、普及率は不良であった。しかし、同種血供給源である献血人口の減少傾向から、術前自己血貯血を今一度普及させることが必要である。両血液の有効性や問題点を医学的・医療経済的に検討する。

【対象および方法】

2011年11月から2013年1月までに当科にて待機的開心術に対して自己血貯血を行い、同種血追加投与なしで経過できた26例(A群)と、貯血を施行しなかった20例(C群)を対照として選択し、医学的・医療経済的に有効か、後ろ向きに比較検討した。

【結果】

術前因子、重症度は有意差を認めず、死亡例もなかった。A群における平均貯血量は1111.5mlであった。術中出血量は同等になるように選択しているため有意差はなかったが、術中血液製剤使用量($p<0.05$)・術後出血量($p<0.05$)・総血液製剤使用量($p<0.05$)、術後人工呼吸器装着時間($p<0.05$)は、A群が有意に少なく、輸血に関わる保険請求点数も、A群が有意に少なかった($p<0.05$)。

【考察】

自己血貯血を非施行例では、血液製剤を多く使用し、免疫学的副作用を認めた。自己血貯血症例における、術後出血量や輸血関係の保険請求点数が低いことから、医学的のみならず、医療経済に与える好影響も期待された。

【結 論】

待機的心臓手術において、自己血貯血は医学的のみならず医療経済的にも有用であった。無輸血率を上げることが質の高い医療につながると思われ、さらに人口減少による同種血供給不足を補うことができる重要な方法であり、今一度普及に努める必要があると思われた。